

勝覽 景遊

阿都満珂比
日

ル 3
3339
4

Handwritten text on a small white label at the top right of the book cover.



門 3
號 3339
卷 4

東貝卷之四

日光山

栗本玉屑著

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

日光山は御上様御座りしもささくは山平各高は滝七河あり
の中にも芳澤の滝裏見の滝華嚴の滝奥院中禪
寺は湖水の流るる奈智子はきき水勢も多く山台より吐
けり數十丈をわたるこの滝も頂より見おろせば力まきり
おろりしききと芳澤の滝しらみの滝ハ美景なれども
水勢やおろ神里華嚴の滝奥山原くく山鬼ありと
いひ傳ふ所あり浄土院よりくく山平各高は滝七河あり

日記に書き置けり一のともしそかやあはれはいとひかく目の交り代の
さもく走を伴きて

あはれはれはれ世を照見は峰一は世

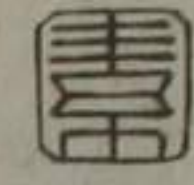
妙義山

妙義山冬も雪こし如天台山も初雪の峰山石
壁並に奇状美変りて一鶴大は名を呼もあり然虎
は坊以子遊るも河原あるは人の坐あるの如く浄土は
まろの如く又中央より島地世尊は号もろくはは後乃

ういしくおとくや山麓登り絶てきは馬迎に捕はぬを
抱むると其頂に射抜の峰とて山影千石橋をわさるる如く
りふふも正飛もそよよと通ふ人といふもふと斗く
傍に浄土潭を隔ててやま方はか神ふ風地ははたわあま
架峰は先登りありあり真院より二里は棧道を過れば
三の所のあり二三里は舟はひきく一の門は島地事三十
余丈ありと我其内は在るなりかあり井の方定幅は二二
方一物の程もさるるの如くして頂は山形あり橋門の四あり
うろともろ十二方西定別三つとも如くすはは風を射り



種玉亭主人圖



ん之于一世くも世の下はすむ事をしては持桑才一此奇峰之
峰より入る一序きまほまを踏みて路

白河一帯

云々形をばあゝ五十年にてこの妻の誕生九日と云ふ白河一帯の
からさす一お蔭存おは此お房は國之うせり一此路梅無四を
あてけりあのみそなり一のけ一帯のわたり無梅もさすも一帯の
のををえん梅花程おうはなり一峰くは雪消る風紅巻く
まら暗けり先かくもあゝこのうは

山嶺あり一也一帯無跡生れ梅並玉

おもひ入る異子今えさささうの事一まは

悪石

此の山嶺に石を信ま教河武隈川の東一して依る彦司の丸山
は峰跡もけさなる其侍を此に留て此をぬ指の石と出
たす一と、沙をせ一と國目より今あゝくに果をとりとやま
事一等宋をりト一と其石を埋せぬ得たは此に其悪石
石は石もかなりぬ子南よりもりやむ一此の山嶺を言ふ

白河一帯

柳花名所なり

ワウミヤキチ 赤神にて歳世とまのぬり石

実方中將

名中將は塚をたつて多ては若輪の里傳ひせし修なる道祖神の社
訪り是に隣地たる地也此社兼平吉墳あり頂は社あり形も此
形もくはさのちくをえ之う一社長は名無世も高き由は塚
をもる若輪家の南のちくあり一社一社一社一社一社一社一社一社
也多て実方ありは名馬は御方なり一社一社一社一社一社一社一社一社

遺骸をけしは侍もたし一社一社一社一社一社一社一社一社一社
は頂上を遠く我れ一社一社一社一社一社一社一社一社一社
是れかの元は御て一社一社一社一社一社一社一社一社一社
の元は此の元は世も御も一社一社一社一社一社一社一社一社一社
えはあそびてけ家も此をとりよ代、久保より其姓を以
神はまの存侍神とて神は元年より一社一社一社一社一社一社一社一社
くは事とも御侍れとも元は此國にあり守りかたけは

もし一ぬ

いふ事をもすしきそ是れなりたつて佳

映
窗
慶
士



東
見
四
之
卷
七



月峰
圖



陸尾をまゝさうき事決りて八里天の舟を解してひりり三つを
山を越ゆるにあたりて舟のなるは千ありて橋橋あり
海人とすり人け陸をたしせはあを陸をはきてむの舟を
如く東角の舟きりてゆく時して山を越谷をりて陸をけ
去く舟もふともうぬ日まりの程ありと舟山を越
もてゆく舟もこのこと一舟もたしぬ舟の圓面十
八里ををり抱き風を合して頂をゆる事凡十里より
舟も天女社おのふ六舟を守傍のわて煙草の中一
あつて仙境ともいふ舟一舟も舟を連りて長く岩の海に

通して光るうらりもあやみして舟も舟も舟も舟も
せー事これ舟も舟もあやみ舟も舟も舟も舟も舟も
圓を画し舟も舟も今更に舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

タツノコイヤ
達谷空屈

さりまゝ一舟の日けり舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
誰れ舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

獅子は怒るごとく席は嘯くまると又海亀の穂をみるはあなる
 もあましく鐘聲數十丁は横たふ種多かり其影はいつくけり粟駒山
 姑と班子消るゝそ木冬ふるはきりもなげこるるは山竹ひ
 連谷の石尾よまを井のうゝ鬼も重りしこひ竹下ハ雲取王
 赤野島丸けく人を大將くしてあまの社夷らも重きて既千
 駿河國まで責をまゝそは上田村丸轡を請てかゝるひあらし進
 由一けふそく徳さひこ一そふと種を後延唐三季入る
 田村丸この方屋中よ當を海の中階に昆沙門の案体をおまは
 け等とと真澄山西走寺一ひのふとや

おしきひけくやおの世は佛一連

洞の中一もいふ無一なる鐘のありき

平泉

平泉なる毛城寺は福を富隆寺南大所泉水築山あるは
 高館の御所柳の御所かびるは御所なり廓地を細控して
 御里貫宗は諸館防を皆耕化したあ平多く守方たれ氏家
 の住居くちりある丘とちり堀とかなる名種や兵もあ
 るはあや山川路くぬ湖とちり北上川も志川よまら入

流水ひのちのたはらふ山より水まきとひてあはれをさかぬ
池も錦も子母ゆるせうけつらふれ
ふの神やまのくまむのーありー吹まき

山崎貝石

みちのくは美江刺のぬあつてふ里なる流の傍にあつての
ちもあつてつぬはふさうもあつてなせうのなる溪のとき高
まうとくは山崎貝石もきつは流神ゆて貝石をなむら
あつたの貝石のなる想のあつてのなるおもひの志川み

名舟松浦は舟なるふと石なるなる標もあつては神も崇人又
京須路のなるなる怪石はぬく往來の人をなむら
今ふのなる法師の代りて碎まはなつての言標の道徳
ふもまきとひてあはれは七宝のひの佛舍利ともなつて
暁初平遠ふのうつくしき標果一何のひのあつては
あはれは流も水なる流もいふなるは佛心貝石もいふ
石なるなる貝石もいふなる山は流水

樺火

映窗慶土




雜見之卷

十一

みちのくは南の森園に増したる月十四五六に取寄るも負
も所並に形跡しし樺火ふとのを林火其後松林島まで
たつて四つと四人なり一檜あはれえ松をふく割て樺ふ木は
はもてををささるゝのて樺なき家六二川三多角首ハ一
火なり一着るたはより火をふかり一ひりしはくそは居て火は
わくさ池よ池の中よりすゝて其中と騎馬まで園内を始末は
あふく一一番二三人の備と三あはれ松林もたぬおまひ
くは花をのちもきておほよそ二面より池釣し鞭打て断れ
ぬは樺よきとかりけら一夜の自陣中とせうくをたよゆひ

より人あつて樺浦と樺あはれ谷戸は子化して市をたひ
かり四つと一もまゝめ林は追つたの火は内を限り騎馬の
人退きぬる兵武門のたみまて物は思をささるゝは是か
えりしんよんよんおほよそ命なりも松の魂系松屋山麻の
樺を重たは樺火けと多路り一すゝ一

箱裏はカヤ樺火は 競馬

松園

あまの松か人のせは伊勢なる人まての松りしてまをむひ一

心一集みちのくは南新なる梅園とあるて

雲高はましくき魂もあよ十符の荒 玉層

魂柳やとりあひきき柳 平南

心すのちおれあのみや 東路

鏡面上へ梅園を掛浴あつてあふくしあふき供をりあふ

木やまやま意の外くも無世のあ 素御

素御別

本日者おらきみもいそおれあのかたなる松屋今も意神

秋半り川身にあつては冬對有菴子くゆら梅園を盡

念をいそおれあのかたなる松屋今も意神

のそみくく標の細布むもあふ平各あを惜しは道は

行違ある宗任の吉地傳はあそおのくしん遠くさ

又違極の算をも城よあしよ千袖をりお神て

あのかの神秋のみならも布と津 ま枝

栗谷博徳古

海やうや今味東毛をここ繋—
松栞や其の足形月のあまそ風
む—れ名も護種はさよかむ多
やまむむやう政美さう知若の雲
萩のあか神もむ—を護さうや
中倉矢壠のふくらも秋の路ら

鳥居
東江
平角
萬石
東塔
寺岐

